

## 横断面図による中心市街地を含む河川空間の景観分析

熊本大学工学部 学生会員 ○西村 渉 熊本大学工学部 正会員 星野 裕司  
 熊本大学工学部 正会員 小林 一郎 熊本大学大学院 学生会員 井芹絵里奈

### 1. はじめに

河川景観の魅力として、自然という指標が一般的に挙げられる。一方、都市河川景観の魅力は、都市によって様であり、個々の都市色が感じられる。つまり都市河川景観は、河川空間のみではなく、周辺都市との関係によって景観の質が形成されていると考えられる。

筆者らは、そのような都市と河川との関係に配慮した都市河川景観について考え、「街と河川の結びつき」に着眼し、都市河川景観を市街地まで含むものとして捉えた。

そこで本研究では、まず対象となる河川を選定し、現地調査を行った。そこで河川空間と市街地という河川流軸に対して横断方向の関係を検討するため、河川～市街地の地物を含めた横断面図を作成。後に調査時に撮影した写真及び平面図と共に分析を行った。

### 2. 研究対象

本研究において対象となる河川について以下の2点の条件を定めた。

- ①「街と河川の結びつき」を主題とするため、都市河川を有する都市が前提となる。そこで「中心市街地整備改善活性化法」により定められた中心市街地の範囲(図-1)に隣接・貫通した河川を有する都市であることを条件とした。
- ②中心市街地に関して、都市色が際立った、成熟した都市であることが重要となる。よって政令指定都市及び県庁所在地であることを条件とした。

結果、本研究における研究対象としては、九州内における前述の条件に適合した7河川：那珂川(福岡市)・紫川(北九州市)・中島川(長崎市)・白川(熊本市)・大分川(大分市)・大淀川(宮崎市)・甲突川(鹿児島市)に決定し、現地調査を行った。

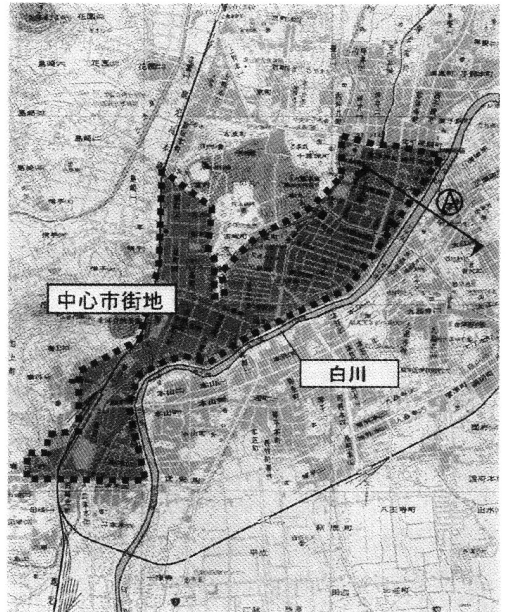


図-1：中心市街地図(熊本市)

### 3. 横断面図による分析

本研究では、河川空間と市街地の関係を検討するため、両ゾーンを一体の空間として捉えている。そこで検討に際しては、河川より市街地まで含んだ横断面図を作成し、用いた。

作成した横断面図は、河川横断方向に連続した空間が広範囲に渡って示しており、また歩行者レベルに合わせ、細部のディテールまで描画してある。

作成にあたっては、2. 研究対象に挙げた7河川において、中心市街地内の利用形態を検討し、断面位置を決定した後、河川ごとに2～4断面を作成した。範囲は水際より0～150mとし、国土交通省国土地理院発行の1/2500国土基本図より地形も考慮した。また、建築物・樹木等の地物も含めた。

#### 4. 新たな 河川～市街地の捉え方

各河川の横断面図を分析した結果、以下の2点の特徴に注目した。

- ①水際～河川に面した建築物の範囲において、複雑かつ細やかなディテールが見られる(図-2)。
  - ②市街地の範囲においては、建築物・道路等の垂直かつ水平な一様なディテール構成が見られる。
- この特徴から、水際～河川に面した建築物の範囲に、「街と河川を結ぶ」役割が集約されていると考えた。

これより、河川～市街地において次の3つのゾーンに分かれることを示した(図-3)。まず河川流水の範囲を『水』ゾーンとし、次に水際～河川に面した建築物の範囲を、2つのものを繋ぐイメージとして「節」と捉え、『節』ゾーンとする。最後に河川に面した建築物以降の範囲を『街』ゾーンとした。

この3ゾーンに分ける概念において、注目するポイントは『節』ゾーンである。河川と市街地を繋ぐ役割に焦点を絞っており、また河川～市街地において、河川景観の差異が特に色濃く出る範囲でもある。

この概念において調査を行った九州7河川での比較検討を行い、「街と河川の結びつき」に具体的な考察を加えていく。

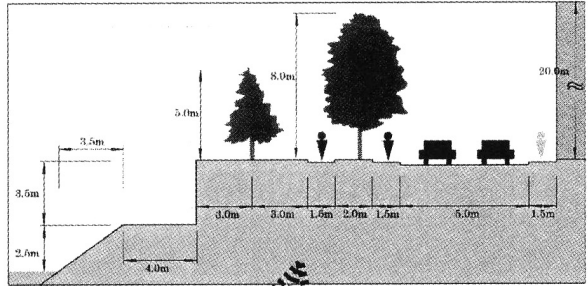


図-2：細部のディテール

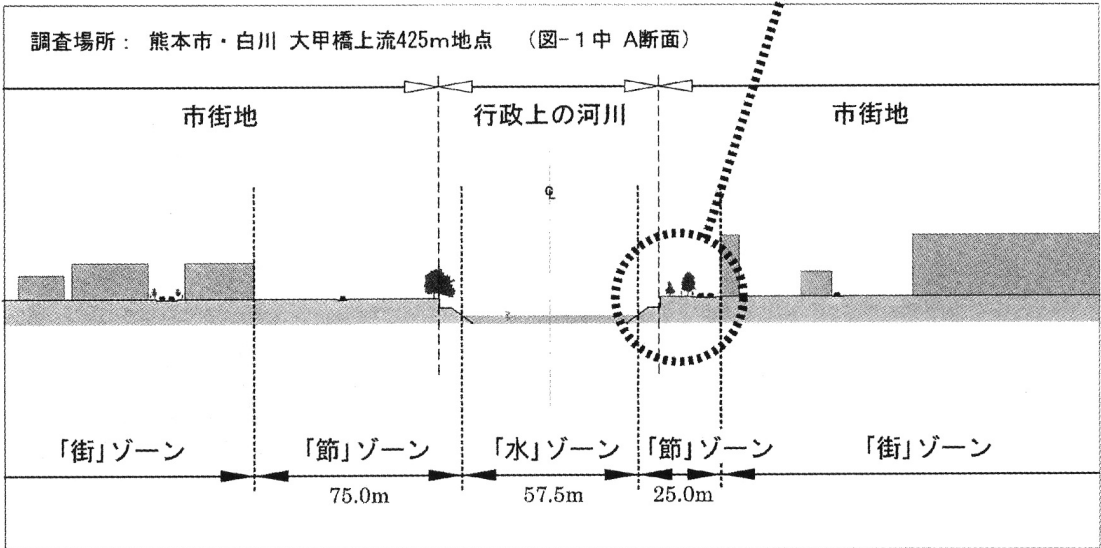


図-3：新たな 河川～市街地のゾーン概念

#### 5. おわりに

一般的な河川空間の範囲に対する概念として、低水敷・高水敷・堤防敷までがいわゆる行政的な河川として捉えられてきた。河川整備を行う際もこの範囲でなされていることが多く、閉鎖的な空間になりがちである。本研究では「街と河川を結ぶ」考えを『節』ゾーンの概念という形で示し、具体的な範囲として提案した。今後は『節』ゾーンの具体的なディテールに関する考察が課題である。

- <参考文献> 1) 陣内秀信・中山繁信：実測術，学芸出版社  
 2) 戸沼幸市：人間尺度論，彰国社